

## 園舎・園庭の改善を通しての保育実践の変容（Ⅱ）

—研究者と保育者によるアクションリサーチの試み—

○福田秀子（山脇学園短期大学） 無藤隆（お茶の水女子大学） 向山陽子（駒場幼稚園）

### I はじめに

幼児期の心身発達は子どもが慣れ親しんだ生活の場所で行動体験を重ねることにより促されるという視点から<sup>1)</sup>、福田らはK幼稚園における園舎の改善と子どもの活動の変化について観察検討した<sup>2)</sup>。'73年竣工の園舎は、各保育室が独立し閉鎖的であったが、'95年の園長交代に伴って、子どもの自主性を重んじた自由感のある保育へと転換され、保育方針に合う園舎・園庭・屋上へと改善が進んだ。園舎内を循環性のある構造に変えた結果、回遊行動が生じ、園舎内全体の遊びが活性化した。

園舎は園庭に面した部分が少なく奥行きが長い。'99年春までの園舎と園庭のつながりは玄関のみで、子どもには2階から園庭が見えず、物理的にも視覚的にも内と外が繋がっていなかった。1階と2階を直接つなぐ外階段（図中の①）と2階入口テラス②を新設したところ、外遊びが増加した。本研究では園庭と屋上の改善とその後の子どもの活動の様子を観察し、遊びを促す園環境作りについて考察する。

### II 方法

観察者と保育実践者の協力により園舎・園庭の改善を進め、その後の子どもの活動の様子を観察・記録するアクションリサーチ法をとる。園長の保育実践記録と改修記録('95, 9~'00, 12)、および園長へのインタビュー、観察者による観察記録('98, 4~'00, 12)と保育者へのインタビュー等を資料とした。

**観察対象:**K幼稚園児 102, 保育者 22 事務専任 1 ('98, 4現在)、による保育の様子と保育の場としての園庭・屋上。

**観察方法:**保育中の園内を1周約90分でまわり、子どもたちがどのような場所でどのような活動をしているかを観察・記録し、補助として写真撮影する。また、保育終了後、保育者たちから状況説明やエピソード等の情報を得る。

### III 結果と考察

#### 1. 園庭の改善と子どもの活動

諸般の事情により、K園では外遊びはほとんど行われていなかったが、95年秋以降保育方針がかわり、外遊びを促す園庭作りがすすめられた。主な改善箇所を

図中に番号で示す。

はじめに園庭に備わっていた遊具等は、木製ジャングルジム（使用不可能）、鉄棒と砂場だけで、樹木も少なかった。ジャングルジムは修理して上部分を東北隅に移し、ニワトリ小屋に転用③、下の2つの部分④は丸太とロープでアスレチック風につなぎ、砂場をその下まで拡張した。

東南隅の物置を移動して、丸太組のすべり台を新設⑤、下を砂場に⑥。すべり台は当時の外遊びに不慣れな子どもたちの安全上、保育者の手の届く高さにした。現在の年長児には物足りない高さであるが、アスレチック的ハシゴがついて、広いヤグラの上と下が砂まごとの家や陣地に使われている。

当時の子どもには高すぎた鉄棒は、もとの位置から2回移動し⑦、高さ60cmと75cmにしたところ、よく遊ぶようになった。年少から遊んだ子どもたちは年長になると物足りなくなり、のちに90cmの鉄棒を新設した⑧。

新設遊具として、タイヤブランコ⑨、ターザンロープ⑩とワイヤーリールなどもある。ワイヤーリールはテーブルに使われるが、転がしたり上に立って不安定さを楽しむこともある。これらは仙田<sup>3)</sup>が遊びやすい空間の構造としてあげた目まい体験ができる遊具である。タイヤブランコの近くにある古木⑪の上を平均台のように歩いてゆくと、切り株⑫が飛び石のように並んでおり、それをたどると鉄棒やのぼり棒⑬（古木）、その奥にすべり台や砂場があるという具合に、さり気なく適当な間隔で遊具が連続している。

塀に沿って多くの木々や草花を植え、季節の変化がはっきり見えて草摘みやダンゴムシ、カタツムリなども採集できるようになった。スロープに沿って植栽して、春、夏には緑のトンネルができた⑭。

庭の中央では縦横に走りまわったり、三輪車や車が行き交うが、植え込みやすべり台、切り株、古木に沿って踏み固められた小道ができています。スロープと玄関テラスも含めると、ぐるりと園庭の外側を循環しており、多人数の追いかけっこやかくれんぼ、小人数での採集やおしゃべり、ままごと、他の子の遊びを見るなど、いろいろな行動が展開する。園庭の遊具や樹

木の配置、園舎入口周辺的设计により、全体が循環性をもち、同時に少し陰になった静かな場所や、眺める場所もある。玄関テラスは園庭より高い所にあり、2階テラス・外階段からも園庭全体を見渡すことができるので、外遊びへ気持ち向きやすい。

1階保育室の外に手洗い場を新設⑮、60 cm幅程の細長い土地に小川を作ってカメを飼った⑯。エサやりを楽しみにしている子どもも多い。

### 2. 屋上の改善

屋上は以前より土を入れミニ田んぼが作られていた。田んぼ⑰を整備し、園庭にあった芋畑を屋上に移動⑩、夏野菜の畑も新設した⑱。三角屋根の修理を兼ねて、大すべり台⑳を作った。傾斜が急で幅が広いので、スリルがあり、子どもたちの人気は高い。上にはカメ型の水槽とスノコ敷があり㉑、夏には水遊びができる。両側の段々をいちご畑㉒と花壇㉓にした。

周囲には木や草を植え、畑以外は雑草も生えたららっぱにした。夏期はそこにプールを置き、冬期にサッカーができるようフェンスをつけた㉔。よもぎや草の実を摘んだり、取れた野菜を食べたりできる、自然の多い第二の園庭として機能するようになった。

現在のところ、屋上は安全のため、保育者が引率するときだけ使用されるが、庭へ出るように屋上へも自由な出入りが可能になれば、遊び場としてさらに生きるだろう。また、子どもはよく狭い横長の穴から下の庭をのぞいているが、2階テラスのように俯瞰でき、上下で言葉も交わすことが可能になれば、園庭と屋上・園舎がより一体感をもった場になる。

### 3. まとめ

園庭作りはほとんどゼロよりの出発であったが、保育方針と子どもの動線を念頭において年々遊具や草木を増やしてきた。園舎と園庭をつなぐルートを増

やした結果、外遊びが一層盛んになった。95年秋の在園児たちと比べると、現在の子どもの身体能力は格段に発達している。庭を囲む緑も育ち、園庭は仙田<sup>3)</sup>の提唱する遊びを促す構造(循環、目まい体験、別所、穴、俯瞰など)を備えてきたと言えよう。半分陰になった場所も多いので子どもたちは楽しめるが、保育者の目配りが必要である。屋上にはまだ改善課題が多い。今後も子どもの発達や保育状況に合った園環境の検討が必要と思われる。

### 文献

- 1) 無藤隆, トポスにおける発達(1), 幼児の教育, 94-4, 24-31, 1995
- 2) 福田秀子, 無藤隆, 向山陽子, 園舎の改善と保育実践の変容 ー研究者と保育者によるアクションリサーチの試みー, 保育学研究, 38-2, 87-94, 2000
- 3) 仙田満, 遊びの行動と空間, 空間認知の発達研究会編, 空間に生きる, 152-171, 北大路書房, 1995

図 園舎・園庭の配置と主な改善箇所

